
改・第2の人生は波乱の人生！？

黒一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改・第2の人生は波乱の人生！？

【NNコード】

N8878Y

【作者名】

黒一文字

【あらすじ】

少年は事故で死んだ。

少年は神によつて少女となり生き返る。

少女はネギま！の世界に生きる。

これは『第2の人生は波乱の人生！？』の改訂版です。感想お待ち
してます

プロローグ1

俺はいつも日暮のよう高校に通い、そして、いつも日暮のよう
に帰宅するはずだった。

いきなりトラックが突っ込んで

俺の16年の生活が幕を閉じた。

「うひ、うひ

目を開けると何も無い空間にいた。
確か俺は死んだ筈なのに。

「それは私が呼んだのです」

声をした方向を見るとそこには見た目15歳ぐらいの少女がいた。

「この度は申し訳ありませんでした」

うん、とつあえずトライックが突っ込んできたのは私の不手際ですって所かな。

「あなたはエスパーですか？」

うん、俺にはそんな力は無い。

「とりあえず、こちらの偽書としてあなたを転生させます。どこがいいですか？」

うん、迷うな。あ、あれでいいか。

「じゃあ、ネギまの世界で」

「わかりました。どのような力が欲しいですか？」

「えと、それじゃあ

「

- ・不老不死
- ・デバイス、ユニゾンデバイス
- ・魔力、気最大級
- ・とあるシリーズのテレポートと一方通行のレベル5+幻想殺し・・

- ・・・だけ?
- ・変身能力
- ・魔法媒体の指輪

「ず、ずいぶん多いね」

「しようがないよ」

「変身能力か・・・・・元の姿は?」

「あなたの姿を10歳ぐらいで」

「つまり女の姿?」

「ああ。女子の生活も体験したくてな」

「デバイスは?」

「待機はネックレス。起動時は杖のベルカ式で。カートリッジは30発」

「ユニゾンデバイスは?」

「リンクフォース2(ツヴァイ)と同じで」

「・・・・・よし。あと時間は?」

「大戦の時でなるべく『紅き翼』がいるところの近く。そうだな、ナギ達がしゃぶしゃぶしているとき」

「OK。終わったよ」

「ありがとな」

「いえいえ。それではいつてらっしゃい

こうして、俺は第二の人生を歩み始めた。

プロローグ2

ରାଜାରାମ

田観めると私は森の中にいました。

あれ？私の口調が変わっている？

バ
サ
ツ

「ん、神様からの手紙？」

とりあえず読むことにしました。

『これを読んでいるときにはもう着いていることでしょう。自分の名前を決めたらこの紙の下に書いてください。あなたが頼んだ能力の他に魔法の心得を追加しています。デバイスはあなたの首にかかります。あなたが名前をあげてください。ユニゾンデバイスの方はもう少しかかります』

「これかな? うん・・・・・ 決めた。あなたの名前はキリエだよ」

『了解しました。主

「私の名前どうしよう。日本人名前の方がいいな・・・・・あ、あれでいいや」

かきかき・・・・・

私はこう書いた。

結衣咲

シイ

設定

結衣咲
ゆいさき
シイ

年齢 外見10歳

身長 もとの姿で132

体重 秘密

能力

魔力、気

最大級

テレポート&一方通行&幻想殺し
とあるシリーズから。

魔法の心得

あらゆる魔法が使える。

不老不死

老けないし、死なない

変身能力

自分が想像したものに姿を変えることができる

デバイスについて

待機型はネックレス。戦い時にはそのレイジングハート、シグナムのレヴァンティンなどのモードとして戦う。バリアジャケットはその武器の使用者のバリアジャケットを纏う。

「で、ここからどう行けばいいの?」

『私のセンサーで探してみます』

『はい、神様の手違いで死んだ結衣咲シィです。さつきから歩いているんだけどどこに行けばよいのだろうかと考えていたらキリエがセンサーを使ってくれた。』

『あはは～、もう少し近くに落としてくれればよかつたな～』

『主、現実逃避の途中ですが魔力を察知しました』

『ホントーありがとづ、キリエーでどいこ?..』

『今主の視線から北東の位置です。距離は100mです』

『よし、見つかったなら早速しうつ

キュル～

「／＼／＼／＼お腹減った

ナギ side

オッス！俺はナギ・スプリングフィールドだ！今は詠春と師匠とアールで詠春の故郷の料理『鍋料理』を食べるところだ。

「じゃ、早速肉を～」

「あ、ナギーおまつ、何肉を先にいれてるんだよ～」

「・・・・・」

「いいじゃねえか～眞いもんから先でよ～ホラホラ」

「バツ、バカ！火のとおる時間差といつものがあつてな

「・・・・・」

「あーうつせーうつせーぞ、詠春ー・・・・・て、アル？師匠？どうしたんだ？」

さつきからだんまりだから気になつたんだけど。

「お主等。きずかぬか？」

「「は？」」

「ええ、強大な魔力を持った誰かが近づいてきますね」

「あ、ホントだ」

『お、お腹減りました』

「「「」・・・は？」」

今、何て？

「あ、いた。あはは～（バタツ）、あ、この川を渡ればいいんだね」

「「「渡つたら駄目だ（です）（じや）」」」

シイ s.i.d.e

た、助かった。いくら不老不死でも空腹は最大の敵だ。

「貴様、ありがとうございます。お陰様で助かりました」

「いってそれぐらいはお互い様だろ？」

「はー！それで・・・えと」

「どうかしましたか？」

「お礼をしたいので一緒に居ていでですか？」

駄目元でお願いしてみると

「おつ、いいぜー！」

「「おひいく頼むな（お願こします）」」

「さつきの魔力もナギと同じ位じやしのつ」

・・・・・今思つたのだけどこんなに簡単に入れていいのだろうか。

「はい。あ、私は結衣咲シイです」

「俺はナギ・スプリングフィールドだ。ナギでいいぞ」

「アルビレオ・イマです」

「ゼクトじゅ」

「この人、何でこんなに小さこのにナギに師匠と呼ばれているのだろう？」

「青山詠春だ。とこりで結衣咲つて」

「あ、出身は日本です」

「ナギのな」

「さて、鍋食おうか！」

それから私たちは軽い話をしながら鍋料理を食べていたら

ドゴンツ

剣が降ってきた。

いきなりだったので空中に舞った肉を取れなくて泣き声になつたらアルが肉を数枚くれた。

「あとでこれを来てください」

「スクール水着は露出が多いから、少なにものならこよ

アルは何でロリコンなんだらう？」

「ナギ、私がいきたいからいい？」

「おひ、いいぜ」

（キリエ、武器のみセットアップ）

（了解です）

キリエが起動すると手には某魔法少女のな はが使っていた武器に似ている杖が握られていた。

「つおー！」

「凄いですね」

「転移魔法の類いじや らひつか？」

うん、ゼクト。転移魔法の類いじやないよ。

「それじゃ、いきますー！」

私が行つたときに一度詠春が敗れるとこひだつた。

「キリエ、カートリッジロード」

『分かりました』

ガシャンッ

「全力全壊」「ん、なんだ?」スター・ライト、「うおー・あいつか!」
ブレイカーアーーー!!

「グオアアーーー!」

フフフ、いい威力だ。

三人称 side

これを見ていた紅き翼の皆はこう語る。

魔王・・・と

「よし、こへぜーお前ら」

はい、どうも。結衣咲シイです。今は連合側のグレート＝ブリッジ
つて言つてころに来てます。

「ナギー！落ち着いて！まだ始まつていないからー！」

「よし、俺もこへぜー！」

「ラカンー！落ち着けと言つてこむだらうが――――――！」

「ぐふおつー！」

全く。今回は全長300キロで亘りて屹立する巨大要塞「グレート＝ブリッジ」を陥落されたので奪還するとこつ作戦が実行されます。

「・・・よし、時間が来たよ。ナギ」

「よし、行へー！」

「――――ああ（ええ）（うむ）（はこ）ー！」

さて、行き（ちよつとまつて）つて、久しづりだね。神様。

（ローボンテバイスが出来たよ。今から送るね）

あ、ひよつとま（シユンチ）

「　「　「　「　シ　ー　?」　」　」　」

あ～あ。警戒体制に入つたよ。

(「　「　「　めんなさい」)

まあ、いいけどね。何とかしようかな。

「みんな大丈夫。」の子は無害だから

とりあえず納得してくれた。理由はシイだからと・・・・・少し傷ついたよ。

「あ、そうだ。あなたの名前はリインフォース2（ツギヴァイ）だよ」

ほんとは初代がいないけど。

「はいです、マスター！」

う～ん、リインはこれだから可愛いんだよねー。

「それじゃ、わたくしユニゾンしようつか。リイン」

「はいですー！」

「　「　「　「　ゾン・インー！」

ユニゾンすると私の髪は白に近い色になつた。

（注）シイの元の容姿は金髪で腰までりツインテールにしています（リリなの・フェイクスタイル）。

「じゃ、こいつへくるね

「あ、ああ

私はとあるシリーズのテレビで敵陣の上空へ移動、そして

「キリエ、モード』夜天の書』 &『シユベルトクロイツ』

『分かりました、主』

私は魔方陣を展開し、ある魔法を唱える。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍。』『ストルティン』

ナギ side

「『千の雷』！」

ふう。つか、敵多すぎだろ！？

（ナギ、下がつてください

ん、アル？どうしたんだ？

(シイさんが何かしようとしています。あなたの上です)

アルに言われてみるとシイが魔方陣を開いて、何だ?
あの魔方陣?

(ナギ、早く!)

お、おう。

俺が下がつたら、石の槍が降ってきた。・・・・あ、ええ!? 石の槍が当たった奴等が石化した!?

・・・・て、回復している奴がいるけど全く治らない。もしかして、永久石化附加の石の槍か?

そうしている内にシイが光線をはなって敵陣を後退させたので俺たちの勝利となった。

結衣咲 siide

「おい、あの石化の槍はなんだよ! あいつら石化したぞ!」

「しかも、直せていませんでしたね。あちらには有力な治癒術師がいましたが」「あの魔方陣は何じゃ? 見たこともないが」

「「皆（皆さん）、落ち着いて（下さい）!」」

「 「 「 「 「落ち着いていられるか（まさか）……」「」「」「

「 「ええ！？」

戦闘が終わり帰ってきたらいきなり質問攻めされた。しかも、めつたに怒鳴らないアルも。

（はあ。キリエ、リイン、言おうか？）

（私は構いません）

（リインも大丈夫です）

あれ？リインって自分のことリインって言つてたっけ？

「まずは石の槍。『ミストルティン』。

当たつた奴を石化させる魔法。

なぜ石化が治らないか。それは、魔力の根元が違うから。こちらの魔法使いは自分の流れる魔力を操り発動する。

それと違つて私の魔法は自分の体内のリンカーコアという魔力源を消費して発動する。

因みに、私はこっちの魔法も使えるよ

『そして、私はデバイスのキリエです』

「！」の子は武器となり、私を補助してくれる子だよ

「リインはリインフォース2（ツヴァイ）と言つです。リインはコ二ゾンデバイスです！」

「「「「「ユニゾンデバイス?」」」」」

「ユーロンデバイスは契約したものとユーロン出来るの。ユーロンすると魔力を增幅したり、そのユーロンデバイスの魔法が使えるの」

「するとリインさんはリンクアーコアの方の魔法使いですか？」

「はいです！因みにリンカーノアを消費する魔法を使う人は魔導師と呼ばれるです！」

リイン、その知識どこから知ったの？

神様、私が入れました。

何か変な電波が来たけど無視しよう。

神様 ひど！？

因みにナギが『千の呪文の男』と呼ばると同時に私も味方から『幾多の武器の少女』。まあ、キリエのモードを切り替えるからね。敵から『終焉の悪魔』と呼ばれるよつになつた。

第3話

ナギ side

「なんだよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出しても」

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

オツス。俺はナギだ。今回は奪還作戦の時に仲間になつたガトウに呼ばれてメガロメセンブリアに来ている。

「協力者？」

「そうだ」

いきなり目の端に人が現れる。

「マクギル元老院議員！」

「いや、わしちやう。主賓はあちらのお方だ。ウェスペルタティア王国・・・・アリカ王女」

現れた人物は何か・・・・姫子ちゃんに似ていた。

シイ side

ナギがアリカ様と会談している間、私は戦争地域にいた。

「酷い……」

ここら辺は魔法世界で珍しい能力を持つ種族がいた集落だ。だが、戦争によって巻き込まれ、更に連合軍が脅迫などをして多くの人が死んだり、連れていかれたりした。リンと探したが生存者はいなかつた。

「リン、次行くよ

「はい……」

私たちはテレビポートで次の地域に行つた

第4話

シイ side

メガロメセンブリア某所

えつと・・・・・どうこう事だらうか、これ？

『紅き翼を探せ！まだ何処かにいる筈だ！』

・・・・・何やつたのかはわかつた。ちなみに私はロープを被つて
いるから見つからない。とりあえず、予想的には紅き翼の隠れ家が
ある『オリンボス山』に行こう。テレポートで行けるかな？

シュンツ

オリンボス山『紅き翼』隠れ家

シュンツ

で、出来た。正直出来るかわからなかつたけどできて良かつた。

『いいぜ。俺の杖と翼、アンタに預けよつ』

ん？」の場面ってあの26巻の最初のかな？

「アリエーヌのはシイじやな？」

「あ、バレた？」

「バレバレじや」

「「「「「…………あ」「」「」「」」」

「シイかの？」

「やうだよ、ゼクト」

「シイ」

「ん？」

そこには鬼も逃げそうな黒いオーラをまとった詠春がいた
…………な、何か詠春の笑顔が怖い。

「今までどこに行っていたんだ？」

「えつと、戦争地域に……（ガクガクブルブル）」

「嘘をつくな……」

「ひうー？（ビクウツ）」

「怖いよ～。

「詠春、落ち着いて下さい。何らかの事情で帰れなかつたのでしょ
う。ほら、シイがこんなに去っていますよ?」

「う、すまない・・・・シイ

「う、うん

「よし、シイも戻ってきたから行くか

「え? へ?

「・・・・どつか

「 」

少しでも期待した私がバカだつたよ。

【シイ s.i.d.e】

「・・・・・」

返事がないただのしかり「死んで・・・無い・・・よ・・・

・「生きていたか。b y黒一文字

ど、どうも結衣咲・・・シイで・・・す・・・。

一体何があつたといつとこいつです。b y黒一文字

（回想スタート）

「『闇の魔法』かあ・・・」

『主なら大丈夫じゃないですか?』

私はナギ達と再会して一ヶ月がたつた時にふと想い出したように呟いた。

「まあそつだね」

『死ぬ痛みはしますが』

「それは嫌なんだけど……」

そう、いくら不老不死でも死ぬ痛みはする。私はその事で不安だった。

『何事でもチャレンジです！』

「まあいいかな。キリエ、オリジナルモード『ロッド（杖）』セットアップ」

『了解です、主』

（注）シイのオリジナルモードのバリアジャケットは紫を主体とした服です。

「キリエ、補助お願い。魔力放出20%」

『了解』

「ディイラ・アルクス・メラーネ……契約により我にしたがえ高殿の王。来たれ、巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稻妻。『千の雷』固定」

『

『固定率98%……行けます』

『掌……握！』

グッ、思つてはいたよりもキツー！これをネギやヒガマは使つてはいたの！？

『安定率……………29%！ダメです…!!…』

「いっ、あああー！」

【ナギs.i.d e】

ズガアアアン…………

「な、なんだ…！」

今の雷だろー！なんで……………！

「歸匠ー！シイはー！」

「シイなうさつ！雷が落ちた所じゃー！」

「へへー！」

とこかく、急いでシイのところへ行かなことー。

「シイー！」

俺達が着いたときにはシイが倒れていた。

「おいシイ！大丈夫か！」

「・・・・・」

返事がない。・・・・・嘘だろ？

『大丈夫です』

「お前はキリエ・・・・・」

たしかでばいす？・・・・だつけ？

『主はじきに田をさまします』

「そりなのか

よ、よかつた。死んでいるかと思った・・・・・。

回想終了

【シイ s.i.d.e】

「それにしてもよく生きていましたね」

アルがそんなことを言い出した。

「確かにのう。ナギと同じ位の魔力じゅうたしの。あれを受けたらほとんど消し飛ぶはずじゃ」

ゼクトが続く。・・・・・て、あれ?さつき私が使用した魔力は20%ぐらいだつたよ?

そして、私はある点に気付く

「あれ、言つてなかつたつけ?私は不老不死だよ?」

ピシッ

あ、固まつた。なんかお約束の展開のよ

「「何いいいいい!……!」

み、耳が・・・・・

「何だよ、心配して損したわ！！」

ナギ、それでも心配して。

「わ、私は知っていましたよ？あなたと出会ってから姿が変わつていませんから」

アル、膝が笑つてゐるよ？あの『angel beats!』直井文人みたいに。

「・・・・・」

ゼクト、詠春、帰つてきて。ゼクトはほぼ不老不死だよね？

「なるほどな・・・・・だから会員が増えているわけだ（ボソッ）」

ラカン、せりえているよ。会員つて何の事？

こうしてナギの暴走、アルの強がり、ゼクトと詠春の現実逃避が落ち着くまで一時間かかった。

数日後

「え、模擬戦？」

「ああ、そうだ」

詠春がいきなり提案してきました。詠春、そんなこと言つたらダメだよ。なぜなら

「ああ！シイと戦えるのか！」

「俺も久々に暴れるか！」

ナギとラカン（バカ）が戦鬪狂バトルジャノキだから。

「いいだろ。それぐらいは

「まあ、いいけど・・・・・・

しじうがなく、私は了承した。

アル「準備はいいですか？」

ナ&ラ&シ&詠「「「「OK!」」」

ゼクト「では、始めじゃ」

火蓋は切つて落とされた。

・・・・・次回へ！by黒一文字

『『『『ズザザアアアアアツ』』』』

第6話

「前回のあいすじへ

ナギ達と模擬戦をする」ことになったシイ・・・・・

結衣咲シイ

VS

ナギ・スプリングファイールド

&
ジャック・ラカン

&

青山詠春

「・・・・・て、私ひとりいいいつー?」

シイは勝てるのか!?

「誰かつっこんでええ!ー!ー!ー!」

「それでは・・・始め！」

ドンッ

アルの掛け声で試合が始まった途端にナギ、ラカン、詠春がシイに突っ込んできた。

「行くぜ！『雷の暴風』ツー！」

（ええ！？無詠唱！？）

ナギが先制攻撃として『雷の暴風』を撃つてきた。

（クツ、『テレポート』！）

シイはギリギリのタイミングで避ける。

「アーティファクト『千の顔を持つ英雄』！」

「ツー！キリエ、モードオリジナル『^{ソード}剣』！」

ガキキキキンッ

（って、よくそんな量の剣をその速さで投げるね・・・）

（ってそういうあなたも対応できるね！神

なぜか神様まで観戦している。

「クッ、数が多い・・・・・・」「フッ！」「つー？」

考え事している暇を『えないと』言わんばかりにどんどん追撃していくナギチーム

「これで終わりだ、斬岩剣！」

ここで詠春が左から剣技を放った

ガキーンッ

「なつ！？」

が、それはシイの左腕によつて止められた。

「モード双剣」
モード双剣モードツインソード

そう、シイは左腕に剣を隠し持つっていたのだ—by神

アル side

・・・・・・・

「・・・・のう、アルよ」

「…………なんでしょうか」

「先ほどから誰かの声が聞こえぬか?」

「ええ、聞けますね」

「もしかしたらワシら以外にも誰かが見ているところ」とじやな？」

「ええ、そうですね」

・・・・・ もうひとつや二、 ゼクト。 もうもかが『 ロボ神 』 と書かれていた事だ。

ズドオオオン・・・・・・・・

「もしかして……神様は……いるのでしょうか?」

シイ side

ぐつうう、最強クラス一人と準最強クラス一人じゃ勝てないって。
・・・・・ しょうがない、使うか。

『主?』

「（キリエ……『闇の魔法』を使つよ）」

『（なつ、ダメです主ー）』

「（……大丈夫）」

『（…………わかつました。ですが条件です）』

「（条件？）」

『（おかしいと思つたらすぐ解除してくださー）』

「（わかつた）」

ガラッ

岩オモツ

『当然です』

キリエ、クールにつつこまないで。

「それじゃ、やりますか。キリエ、魔力放出5%」

『了解』

「ティラ・アルクス・メラーネ……契約により我にしたがえ高殿の王。来たれ、巨人を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稻妻。『千の雷』固定」

「

『固定率97%』

・・・・・ いける！

「掌握！！」

ナギ side

ズドオオオオン・・・・・・

な、なんだ？

「大方、シイが何かしたのだろう。二人とも油断するなよ？」

「わかつてるつて。シイ嬢ちゃんも結構つえーからな

・・・・・ 風が・・・・・・

パシイツ

「ンゴハアツ！？」

「「なつ！？」

俺が見たものは吹き飛ばされるラカンと・・・・・雷を纏つたシ

いた。

「術式兵装・・・・・『雷天大壯』！」

シイ side

ふう

『主、大丈夫ですか？』

「なんとか」

「おいおい、冗談だろ？」

「冗談じゃないよ、ナギ・・・・・キリエ、モード『バルティイツシユザンバー』」

了解

私の姿がフェイト・テスター・ロットサそのままになる。

「アーティスト・ランサー」

Get set

私の周りに光球が9つ現れる。

「雷鳴劍！」

詠春が刀に雷を纏わせ、つっこんでくる。

「『魔法の射手・連弾・雷の1001矢』！」

ナギが総計1001本の矢を放つ。

「オラア！」

ラカンが腕を振りかぶる。

それらを

に あるシリーズのベクトルで操りそれに返す。 その追い討ち

「『フォトンランサー』…………ファイヤ！」

雷の槍で撃つ。そして

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ、いま導きのもと降りきたれ・・・・バルエル・ザルエル・ブラウゼル

L

私の周りにさつきよりも大きい光球が現れる。

「ぐつお、。
な、何だあれは？」

そして・・・放つ！

「『サンダーフォール』ツ！！」

ズガシャアアアアン・・・・・・

・・・・・

「キリエ」

『何でしょ、う？』

「大丈夫だよね？」

『大丈夫でしょう』

アル&ゼクト

「「シイ」」

「――までとは・・・・・」

「あなたもバグキャラでしたか・・・・・」

シイ side

「へ、仮契約？」

「そうです」

何かいきなりストレートに言われたよ。

「何で？」

「最終決戦だからです」

「……契約方法は？」

「キスです」

いや、わかつっていたよ。でもね……まだ彼氏とかがないのにキスなんてえええ！！

あなた、元は男だといつの忘れているねりy神

「大丈夫です」

「ふえ？」

何か案もあるのかな?

「ナギも初めてなので」

「シイ、諦めるんだ！（ガシッ）」

「えいしゅうううん！放せえええ！」

詠春に後ろから羽交い締めにされた。ダメだ、動けない！・・・・・
ハツ！

「誰か助けてえええ――変態に襲われる――――――・」

「何て事を言つんだ、シイ！…とにかく…………諦めろ（ボソッ）」

詠春が何か言つた瞬間、首筋に何かを当てられて、私は意識を闇に落とした。

目を覚ますと一枚の仮契約カードが。

「うう・・・・・ヒグ・・・・初めてだつたのに・・・・・」

私は一晩中枕を涙で濡らした。

次の日

「シイ、使い方は「わかってるよ」そうですか」

仮契約した次の日、アーティファクトを試すことにした。カードには私と沢山の武器が描かれている。中には詠春の刀やアルの本、挙げ句にナギの杖まである

「^{アーティファクト}来たれ」

私がキーワードを言つとなぜか使い方が流れ込んできた

「ナギの杖……」

私が想像するとナギの杖が出てきた

「……え？」

アルが固まっている

「詠春の刀……」

想像すると次は詠春の刀『夕凪』が出てきた。ナギの杖は出たまま

「なるほど……」

つまりは私が知っている武器を出せるといつ訳だ

「……ハツー私は何を？」

今『じり気付いた』アルは放つておき、私はこのアーティファクトを『幾多の絆を結ぶ英雄』と名付けた。因みに沢山武器が書いてあつたのはジャックのアーティファクトが原因だと思う

数日後

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろう？悪の組織なんてそんなもんだ」

「そうだね。でもその周りは自動人形や召喚魔でいっぱいだよ？」

「ゲッ、マジか」

今私達は『墓守り人の宮殿』の見えるところにいる。最終決戦前だ、ナギでも真剣になつてゐる。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました！」「おう！」

あの人は……原作でアリアドネー総長になつてゐる人だ。……
・・・名前忘れた。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりや、俺達が本丸
に突入できる。頼んだぜ」

「ハツ！それで、あの・・・ナギ殿、シイ殿」

「ん？」

「どうしたの？」

「顔が赤いよ？」

「ササササインをお願いできないでしょ？」

「「いいぜ（いいよ）」」

「そ、尊敬してました」

サインを書いて渡す。・・・・・「らジャック、アル、笑うな。

「とりあえず、行くよ。ガトウさんもなるべく早くお願ひします」

『わかった』

「キリヒ、モード『弓』」^{ボウ}

『了解です』

「リイン、ゴーヴン」

「はいです！」

「「ゴーヴン・イン」」

私は『』を引く。そしてキーワードを書く。

「キリエ、カートリッジロード」
ガシャンッ

ロードすると魔力で構築された矢が現れる

「リイン」

『はいです。氷の力よ、我が主に力を！』

「行くよ・・・・『アブソリュート』」

私は数キロ先の召喚魔に向く、『』を放つとその召喚魔の周り一帯を氷で覆い、砕け散った。

「行くぜ！－」

ナギの声で全軍突撃した。

三人称 side

墓所に着くと仲間を連れたアールウェンクスがいた。

「やあ『千の呪文の男』またあつたね。そして初めまして、『幾多の武器の少女』。僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまつたよ。この辺りでケリにしよう」

「ナギ、私は姫子ちゃんのところに行くからー。」

「おうー。」

「行かせるとと思うかい？」

アールウェンクスがそう言つと石の槍が数本シイに飛ばされる。しかし

「遅いよー。」

すべてかわし、奥に行く。

「…………ビ」「？」

しばらく歩いたら迷ひてしまったよ。どうしてか…………で、
あれは…………

「ほう、人形共と戦つていたのでは?」

…………いましたよ造物主。どうしてか…………選択肢は

・ 戦う
・ 話す
・ 逃げ…………られない

逃げられないの!…………でも、話すがあつてよかつた。

「あなたが造物主…………」

「もうとも呼ばれてる…………ふむ」

「…………?」

イメージ的には顎に手を当て何か考えているポーズだね。え、何で
イメージかだつて?だつて顔見えないし…………

「おこ」

「…………はい」

「お前、私のも「ならないよつ……」…………そつか」

納得した感じになると造物主は後ろに魔法陣を展開し、砲撃を放つ。

「つー？『フォースフィールド』……」

何でも防ぐフィールドを張り、砲撃を防ぐ。

「見事……」

「ビハリモツ……」

私は外へ逃げたが造物主は来なかつた……

ナギ side

「見事……理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫御子は……ビード？消える前に吐け」

俺はボロボロだが白髪の奴を戦闘不能にした。姫子ちゃんの事を聞こうとしたが

「フ・・フフフ・・・・まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと
思つてゐるのかい？」

「なん・・・だと？」

「こんな答えが返つてきた。黒幕がこいつじゃない？」

バヌッ

・・・・・なつ・・?

「ナ・・・・ナギイ！-！-！」

シイ side

「つー・? 遅かつた!-?」

私が着いた頃にはナギとアールウェンクスが打ち抜かれていた。

「誰だ!-?」

ジャックが向いた先には、先ほど私が見たときには追いかけてなかつた筈の造物主がいた。しかもさつきよりも莫大な魔力を感じた。

「いかんツ!-!」

やばい。ゼクトの『最強防護』やジャックの『気合防御』で防げる

魔力じゃない。私は縮地で移動し

「「シイ！」」

「くつ！？最大魔力！『フォースフィールド』！！」

その瞬間膨大な魔力砲が放たれた。

「…………う…………うん…………」

「…………あれ？ここは…………」

「田を覚ましたか？」

横を見るとアルがいた。

「アル、どうなつたの？」

話を聞くと私は結果的に防ぎきり、そのまま魔力切れで倒れたらしい。その後、ナギとゼクトが造物主を追い、倒したがゼクトが戻らなかつた。

「・・・・・結局、私は何も出来なかつた・・・・・か・・・・・」
「そうでもないです。あなたは私達を守つてくれたじゃないですか」

「…………そうだね。それよりアル、何があるでしょ？」

「ええ。終戦と世界が救われた記念式典です」

「面倒くさいなあ。でも行かないと」

私は体の異常がないか確かめ、下に降りた。

シイ side

「『ルインクラスト』」

ズドドドドドドドドオオオオオオン・・・・・

『ぐああああああー!-?』

『やめひつー?やめてくれつー?』

正直うざつた!

「えつけないですね。シイ」

「別にいいじゃん」

「私たちはケラベラス渓谷に来て、アリカ様救出作戦を実行していた。まあ、一方的な虐殺だけどね。あ、一応非殺傷だよ?殺したらいいないからね。」

「私ちょっと用事があるからこのまま抜けるね」

「はい」

これが5年前の出来事だ。ん、何でこんなに時間が跳躍しているのかだつて？それはわからないよ。結局ナギとアリカさま……アリカさんは婚約したし。でも、わかつたことがある。それは

「貴様が『幾多の武器の少女』か？」

「何かな？」

命を狙われている。気配からして一人かな。殺氣もある。

「！」で死ね！」

雷撃が飛んできた。ん、よく見るとアールウェンクスと似ている上

に服が同じだ。もしかして……あれか。

「なるほど、一番田と言つことだね」

一番田と攻撃方法が違うのはワンパターンにならないためだらつ。

「ヴィシュタル・リ・ショタル・ヴァンゲイド。契約により我に従え高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃ゆる立つ雷霆。百重千重と重なりて走れよ稻妻！！」

不味いな。ナギランクの魔力だ。どうしようかな？

「『千の雷』！」

とりあえず避けよう。

バックステップをするとそこに雷が。

「『おわるせかい』！」

・・・・・あ、やば

パキヤアアアーン・・・・・

・・・・・閉じ込められたよ。でも、大丈夫かな？

『フレアストーム』

「なつ・・・・・！」

氷の中心から炎の渦をだし、氷を溶かす。でも

「あ～ダメだ。中心部しか溶けなかつた・・・・・」

今言つた通り、溶けたのは中心部のみ。閉じ込められた感じかな。時間がかかると普通の人は凍死する。

「フ、そのまま凍死するがいい」

そう言つて、一番目と髪が長い人はどこかに行つてしまつた。

・・・・アホでしょ？

ショーン（テレビポートで脱出）

「ナギは一体どこのやつだ？」

私はどこかへと歩き出した。

ナギ side

「ベックシット」

「む、どうしたんじや？」

「さあ、誰かが噂したんじやないか」

「ナギ、必ず二年後だぞ？」

「おひ」

第9話

「おー、！」

「誰だろ？聞きた覚えがある

「君、帰るよ」

「ああ、わかったわかった。だから『いつ張るな』

・・・・・思い出した。これは

「つー？ー人ともー！」

「？」

キキーデンジ

わたし
俺の記憶だ。

シイ s.i.d.e

「・・・・・

夢から起きると田の前に木が見える。麻帆良学園は近くにあるが夜に行くと廻しまれるため、野宿をしたのだ。

『おせよひじりあこがす、主』

「おせよひじりあ..」

「おせよひじりあ、キリスト、ロイイン」

挨拶をするキリストに挨拶をしき起きよひとするが動かない。何でだろ?.

『主、地面に寝ていたからでは?』

ああ、納得。

「よし、行こう。ライン、キツヒ

「『まこと』ですか。」

・

「で、貴様は誰だ？」

はい、只今麻帆良中学の学園長室に来た瞬間金髪幼女に絡まれました

「幼女言つな……。」

心読めたんだね

「私の名前は結衣咲シイだよ」

「何だと……？」

「名前言つたら顔を青ざめながら驚かれた。……何で？」

「あ、あの『幾多の武器の少女』や『何あの子致命傷なのに来るんだけど！？』の結衣咲シイか！？」

「うん、間違つちゃいない。後者の一つ名は大戦中に失敗して胸に風穴開けられたときだね。」

「もうだけど……実演しようか？風穴開けてからゾンビみたいに這いつくばるの」

「やひんでいいわ！……」

「ああ、面白いな

「たく……私の名はエヴァンジエル・A・K・マクダウル。真祖の吸血鬼だ」

「へ～」

「……驚かないのか？」

「別に……私のまわりには化け物揃いだから」

ナギとかジャックとかナギとかジャックとか・・・・

「うひほん一冊いぢりながにかかる?」

そこには頭の長い妖怪ぬらりひょんがいた

「聞けとねい・・・・・」

あ、座つて『の』の字を書き始めた

— その呼び方は一番酷いぞ！！

「 細衣咲 」
「 それは流石に酔した 」

あら? 何か不謹たね

「さうしておまえは？」

「バツサリ来たな。ナギならとつくに行つたぞ」

「何処に？」

「 ものな」

むう、聞きたことがあったのに・・・・

・・・・あ

「用事思い出した。学園長、教師になる話はまた今度に」

私がそつと学園長は書類を持ったまま固まつた。

「じゃあね~」

私はテレポートである場所に向かつた

・・・・・・・・・・・・・・

シュンツ

「アル～！ いる～！ ？」

「はい。 お久し振りです。 シイ」

え～と、 ここは図書館島の地下だね

「どうやつてここがわかったのですか？」

「勘

「勘に頼るのはラカンだけにして下さい」

「いいじゃん、勘も大切だよ。ん、この紅茶はいいね」

「ありがと「ア」ゼこます」

アルの入れるものは殆んど美味しいからね

「さてと・・・行こうかな?」

「何処にですか?」

「造物主の所」

ピシッ

あ、アルが固まつた

「シイ、[冗談はよしてください]」

「[冗談だよ・・・1%]

「殆んど本気じゃないですか!?」

「大丈夫だよ」

私はアルに優しく笑う

「私は絶対に帰つてくるよ。キリエ、モード『コード・オブ・ザ・ライフメイカー造物主の撃』」

『了解です』

「なつー?」

起動すると私は黒マントに包まれる。何故かキリエに組み込まれて
いたモードがあった。調べてみたら『造物主の撻^{ドマスター^キ}』、それも『最後^{グレート^{グラン}}』
の鍵『だつた。あつていいいのかな?』

「行つてきます、アル」

「・・・・・お氣をつけて、シイ」

「うん・・・・・『リケロード』。造物主の元へ」

私は魔法世界に行つた

シイ side

シユンツ

「・・・・・久し振りだね。ここに来るの」

墓守り人の神殿。魔法世界の大戦の終結した場所・・・・・

「さて・・・・・『リケロード』」

私は神殿内に入った

・・・・・

「む、お前は・・・・・」

「久し振りだね、デュナミス。大戦以来かな？」

「そうだな」

中に入ると紅茶を飲んでいるデュナミスがいた。まあ、好都合かな

「造物主に会いたいんだけど」

「ブツ！」

「うわっ！？汚なっ！？」

「お前は直球で来るんだな」

「わざわざ遠回りで町の必需品あるの?」

面倒だし
・
・
・
・
・

•
•
•
•
•

念話中だね

「よし、ここの奥に主がいる」

「ん、わかった」

以外とすんなり行けたね。あ、『デュナミスに伝えないと

「デュナミス、一番何とかならない？」

「どうこうつ意味だ？」

「どうこうつてね~

「頭」

「それができたら苦労はしないな」

『デュナミスも悩み人らしい。』

そう考へながら造物主の元へ向かつた

・・・・・・・・・・・・

私の体と引き換えにゼクトを解放して欲しい

しばらく歩くと広い場所に出た。確かここは・・・・ジャックと
フェイトがお茶していた場所だつけ?原作知識が曖昧になつてきたよ

「お前は確か・・・・・」

「久し振り、造物主」

ゼクトの体で紅茶を飲んでいる造物主を発見した

「まあ、今日は交渉に来たんだけどね」

「交渉だと?」

「うん、それはね

「何故だ？」

「……私にはこの世界を魔力枯渇しない計画がある」

「それはあり得ない。『完全なる世界』に封じないとこの世界は救われ」

「それは違うね」

造物主の言葉を遮る

「『黄昏の姫御子』の力……」

「『完全魔法無効化』マジックキャンセル」か……」

「うん。その能力を逆手に取り、魔力枯渇を防ぐことが出来る」

「……」

まあ、ここ原作知識は無い。何しろフュイトとネギが仲直り?しどころ今までしか読んでいないからね

「……わかった」

「いいの? 騙しているかもしないのに?」

「賭けてみたくなつた……としか言えないな」

わお、私は考えをねじ曲げないと思つていたんだけどね。そう考え

ていると造物主の身体から黒いものが出てきて、その黒いものが抜けたゼクトの身体が倒れたので支えてあげた。寝かせた後、黒いものの・・・造物主と向き合つ

「じゃあ、始めよっか

「ああ

黒いものが私に入ってきたとき

ドクンッ

「ぐつーーあつーー

いきなり胸が苦しくなり、意識を失った。失つ前にゼクトが田をさましたように見えた

・・・

・・・・・

「・・・・・」

目をさますと真っ白な空間にいた。何も音は無く、ただ真っ白な世界に・・・・・

「造物主・・・・・」

「何だ?」

造物主に呼び掛けると田の前に黒の布を被つた・・・・・アリカさんに似た人がいた

「あなたは・・・・・アリカさん?」

「それは私の今の子孫だ。私の名はアマテル」

「…………ゼクトは？」

「あの者なら既に田が覚めていると想ひござ

「ならいいや。造物主…………いや、アマテルさん」

「何だ？」

「改めて、力を貸してください」

「いや、協力するのは私の方だ。私には考えることができなかつた
案を提案してくれたからな」

「そうだね。じゃあよろしく

「ああ。ところで敬語とタメ口が交互になつていなかつた

あ……

「…………てへ」

「…………」

「それじゃー」

「何だ？」

「なつ！？」

私はアマテルに飛び掛かる

あはは～！」

いや！ ちよこ、 サメ！ あ、 脳揉むなー！ ？ // // // // //

•
•
•
•
•

111

「あ、面白かった！」

アマテルモ乙女たれ」

- 1 -

—
h
?
—

—そりゃあ！！

- 1 -

一 仕返した！！！

お前は弄りかしかあるな「

「私の名前は結衣咲シイだよ！ て、弄り！？ 何しようとするのやー。」

「ん？ そり

「なんですか!? あ、ふあん! / / / / / /

「ほれ、ここに息を吹けば・・・・・」

〔お主等いい加減に

「ん(ふえ)?」

せんか！！

その後起きたら顔を鼻血で赤く染めて倒れている一番田と同じく顔を赤く染めた（鼻血ではない）ゼクトがハリセン（鋼鉄バカラ）を持つていたので

「『何かすみません』」

アマテルと共に謝った

シイ side

……暇だね

「主」
マスター

「ん、何？」

椅子でだらけていたら3番田^{テルティウム}が話しかけてきた。

「連合軍の戦艦がここに来てています。30分もすればもうここに来ます」

「ん~わかった。皆がいなから私とテルティウムしかいなからすぐに行くよ」

「ハ、わかりました」

「よし、『ロケロード』

「へ、調整？」

神殿から少し離れたところに移動して神殿を調査する戦艦を見ていたらテルティウムがいきなり言い出した。

「ハ、私の任務にいたさか支障が出ています
『よい。捨て置け』

因みにアマテルが話すときは念話が多い。なぜかは知らないけど。
「ハ？」

『私がそつ調整した……いや、あえて調整しなかつたと言つべきか。テルティウム』

「ハ……」

『お前は1番田^{ブリーフム}と2番田^{セクンドウム}と違い、私への忠誠や目的意識を設定していない』

「しかし、それでは」

『よいのだ』

テルティウムの言葉を切る。

『つい調子に乗ってセクンドウムのパラメーターを色々MAXまで上げてみたらあんなのになつた』

「「あ…………あ…………」」

なぜか納得してしまつ私とテルティウム。

『お前からは諸々取つ払つてある。いわば素焼きだ

「なんかその言い方酷くない?」

『黙れ。…………まあ、道具の身に目的がないのでは不具合も出ようが
お前はそれでよい。思つ通りに動いてみよ』

「ハ…………」

ズプッ

テルティウムは水の転移で何処かに行つた。

『あてへ、じうすむへ。』

「何が?」

『暫くは宮殿には戻れないのだ。ビロビロののだ?』

「ビロビロへといつても……あ……

『じつした?』

「ナギ元おうかと

『千の呪文の男か……なぜだ?』
サウザントマスター

なぜつて……ねえ……

「親友だから」

『……はあ』

……何か呆れられたんだけど。

『……まあいい。しかし、どこにいるかわかっているのか?』

「大丈夫。探査魔法で見つけたから。『リケロード』」

私はナギの元へ向かつた。

第1-2話（前書き）

ユニーク1000人突破

鳴神ソラさん感想ありがとうございます

第12話

シイ s i d e

シユンツ

着いたのは魔法世界にある1つの村だった。だがそこは何かに襲われたように荒れ果てていた。

「メガロのバカ共は……」

私にはわかつっていた。バカ共が召喚した跡を残しているからだ。

『 う …… 』

「つー?」

確かに聞こえた。私は声が聞こえた辺りに行き、瓦礫があつたので退かしてみると

「お……かあ……さん……」

女の子がいた。だけど重傷だ。間に合つかわからない。

『主』

「わかつてゐる…モード』クラールヴィント』—癒しの風』

女の子の傷が治つていぐ。

・・・・・・・・・・・・

しばらくしたら女の子の傷は完全に治つた。だけど、身体の中まで治つたとは限らない。

『主一・2時の方角から生命反応が…』

「え」

気付いたときには空を飛んでいた。着地して何かされた方向を見る

と

「やつと出やがつたな！造物主！」

ナギがいた。
バカ

「……ナ……」

「もう一発……」

声をかけようとしたらナギが突っ込んできた。

「 殴らせ（ブンッ）ろおおおおおおお（スガニッ）いだつ（
ガラガラガラ）のわああああああ……！」

……今起じたことを説明するよ。

ナギが突っ込んでくる

私が手を払う

ナギが空中に飛ばされる

建物に激突

倒壊

はあ……面倒な……

「ナギ、生めしるへ..」

「生めとるわー..」

あ、生きてた

「「」あー、条件反射でやつてしまつたよ

「.....ホントにイヤが?」

「ナギだよ」

「何で造物主なんだ?」

「えっと、それはね

説明中

「 ところづけ」

「 成る程な」

「 つのもにかいたアリカさんも含めて説明会をした。

「 シイヒリイアマテルはビスムツモツジヤ?」

「 うへん……宮殿に魔力が溜まるのはまだです。だから今はやる」とも無いですし……ナギとアリカさんは子供産まれたんですか?」

「 つむ、双子の男の子と女の子ジヤ」

「 ルハなんですか」

「 あれ? 原作ではネギ一人だったような

「 ……名前は?」

「 ひむ、ネギとアカリジヤ」

「 ……気にしない。私がいる時点で原作崩壊してるから気にしない。うん。」

「 あ、会こに行くなりこれ持つてこつてくれ」

ナギがそう言いながら自分の杖を出してきた。

「了解！」

それを受け取つて転移の準備をする。

「あ、それとあいつらに会つたら俺たちは元氣だつて言つといへ
れ！」

「ん、わかつた」

そう返事をし、私はネギとアカリの村に転移した。

……原作から大きく離れてるけどどうなるんだろう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8878y/>

改・第2の人生は波乱の人生！？

2011年11月30日16時48分発行